

1. そのころ、国主ヘロデは、イエスのうわさを聞いて、
2. 侍従たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が彼のうちに働いているのだ。」
3. 実は、このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕えて縛り、牢に入れたのであった。
4. それは、ヨハネが彼に、「あなたが彼女をめとるのは不法です。」と言い張ったからである。
5. ヘロデはヨハネを殺したかったが、群衆を恐れた。というのは、彼らはヨハネを預言者と認めていたからである。
6. たまたまヘロデの誕生祝いがあって、ヘロデヤの娘がみなの前で踊りを踊ってヘロデを喜ばせた。
7. それで、彼は、その娘に、願う物は何でも必ず上げると、誓って堅い約束をした。
8. ところが、娘は母親にそそのかされて、こう言った。「今ここに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて私に下さい。」
9. 王は心を痛めたが、自分の誓いもあり、また列席の人々の手前もあって、与えるように命令した。
10. 彼は人をやって、牢の中でヨハネの首をはねさせた。
11. そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行った。
12. それから、ヨハネの弟子たちがやって来て、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告した。

説教

今日は、世俗の権力に教会がどう関わるべきかを聖書から学びましょう。

イエスさまと 12 弟子の宣教で、ガリラヤの多くの人が福音を聞きます。彼らは「悔い改めを説き広め、悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした」のでした（マルコ 6:12-13）。宣教の一つの成果として、「国主ヘロデ」が「イエスのうわさを聞いた」ことが紹介されます（マタイ 14:1）。時の為政者の耳に入るほど、イエスさまの宣教は当時の社会に大きな影響をもたらしたのです。イエスさまは有名になりました。

この時のヘロデの反応は興味深いものです。イエスさまのうわさを聞いたヘロデは、思わず侍従たちに言います。「あれはバプテスマのヨハネだ。ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が彼のうちに働いているのだ。」(2) つまり、ヘロデは、死んだはずのヨハネが「死人の中からよみがえって」力ある宣教のわざを働いていると恐れるのです。それというのも、そのヨハネはヘロデ自身が殺したからです。自分が処刑したはずのヨハネが「死人の中からよみがえって」また神のことばを伝えている、それはヘロデに底知れぬ恐怖感を与えたことでしょう。

どうしてヘロデはヨハネを処刑したのでしょうか。事情は 3 節以降で説明されます。「実は、このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕らえて縛り、牢に入れたのであった。」(3) このヘロデの詳しい名はヘロデ・ア

ンテパスで、ガリラヤとペレヤの国主で、ヘロデ大王の領土の一部を継承したため「王」ではありません。彼は、ローマで異母兄弟ピリポの妻ヘロデヤを見初め、自分の妻であったナバテヤの王女と離婚して、ヘロデヤを妻とします。「人がもし、自分の兄弟をめとるなら、それは忌まわしいことだ。」(レビ記 20:21)とあるように、兄弟の存命中に兄弟の妻をめとることは律法に背く罪なのです。それで、ヨハネはヘロデに警告します。「あなたが彼女をめとるのは不法です。」(4) 「不法」という言葉は「正しくないこと、してはならないこと」、神のみこころに反することを意味します。ヨハネは為政者の罪悪を真正面から「不法」だと断罪したのです。

教会が国家とどう関わるかについては、昔から教会で多くの議論が重ねられてきました。「二振りの剣」(ルカ 22:38)から、国家を代表するのが「世俗の剣」、神の国を代表するのが「霊の剣」と理解されます。中世のローマ教会は、これら二つの剣が教会の手にあると主張します。教会が国家を支配しているという考えです。一方、再洗礼派は、国家を悪魔の組織とみなすため、国家に関わるだけ無駄と考えます。これに対し、ルターは、基本的には再洗礼派のように国家と積極的に関わることを否定しながら、それでも為政者が自分の分をわきまえずに霊的なことに口出しする場合には、これに抵抗するよう主張します。為政者が不法な戦争を始める場合にも抵抗するよう呼びかけます。そして、カルヴァンは、より積極的に教会と国家のあり方を考えます。教会が国家を支配するのではなく、さりとて国家が教会を支配するのでもなく、教会も国家も、神が立てた正当な秩序として、互いに独立を保ちながら共に神の栄光のために働くと考えます。そして、神と人を愛するよう命じる「十戒の二枚の板」を実現することが為政者の責任であることから、これに反する時には、教会は為政者に警告する義務が生じると考えました。為政者が国民に偶像崇拜を強要する場合、為政者が不法な戦争を始める場合、そして、これ以外にも為政者が十戒を破る時には、為政者に神のことばを語って警告する責任と義務が教会にはあるというのです。

ヨハネは、為政者が神の律法に背いていることを断罪し、警告しました。「あなたが兄弟の妻をめとることは不法です。」彼は、国家はどうせ悪魔の支配下にあるのだから関わるだけ無駄とは考えません。国家が神の立てた正当な秩序と理解し、為政者も神が立てた正当な職務と理解して、ヘロデに神のことばを語るのです。結局、ヘロデヤの策略で斬首刑となりますが、それでも神のことばを語るのです。

どうしてそうまでしたのでしょうか。そこまでする必要があったのでしょうか。見て見ぬ振りをすればよかったのではないのでしょうか。ヨハネの死は愚かな犬死にだったのでしょか。そうではありません。ヨハネがいのちを賭けて為政者に神のことばを語ったのは、国家が神のことばによって立つという基本的な理解があるからです。神のことばに逆らえば滅びる、これがイスラエルの教訓でした。国は不義によって滅び、正義によって立つのです。だからこそ、ヨハネは神のことばを妥協なく為政者に語りました。見て見ぬ振りをせずに語りました。沈黙すれば、自分も神に呪われるからです。「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言う時、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生き延びるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。」(エレキエル 3:18)

預言者は神に立てられた正式な職務です。王や祭司と並んで、神に立てられた正式な職務です。神に直接立てられるので、時の為政者に認められない場合もあり、エリヤやヨハネのように、見た目は荒野の乞食という場合もあります。でも、それでも国の政治と将来について、王と同じくらい重い責任があるのです。それは、ただひとえに神のことばを語る責任でした。旧約聖書を見ると、預言者たちはヨハネのように為政者に神のことばを預言しました。イスラエルでは、王には、律法を「自分の手元に置き、一生の間、これを読」み、そのすべてを「守り行う」義務が課せられます(申命記 17:18-20)。そして、日常的に律法を民に教える職務として祭司が立てられました(レビ記 10:10-11)。しかし、これらが機能不全に陥る時には、特別に預言者が神に立てられます。王でもなく祭司でもなく、場合によっては素性もわからないような人物が、神に直接任命され、イスラエルの政治システムを完全に飛び越えて、神のことばを語りました。その結果、エリヤやエレミヤのように為政者から迫害されて殺されそうになる者もあり、実際に殺された者もいます。預言者は自分のいのちを賭けて自分の職責を全うしました。

先に紹介したように、国家との関わりを考える立場は、キリスト教界の中にも幅があります。政治を支配しようとする中

世のローマ教会から、隠遁型の再洗礼派、さらには消極的な改革者ルター、そして積極的なカルヴァンに至るまで多様です。この類型から見ると、ヨハネは為政者を支配しようとするのではなく、さりとて政治を無視する隠遁型でもありません。信教の自由を侵害された故の抵抗というわけでもなく、為政者の悪を断罪する、積極的な預言者のあり方を見ます。

国をつくるのは罪深い人間です。黙っていたらどんどん墮落します。神の戒めである十戒に背く不義が、人も国も滅ぼします。だからこそ、神のことばを曲げずに語るのです。首を切られながら神のことばを語ります。政治を支配せず、さりとて隷属・放任するのでもなく、ただただ神のことばを宣教します。剣を使わず、むしろ自分が首を切られながら宣教します。これが預言者ヨハネでした。そして、今日預言者たる教会のあり方です。キリストのからだなる教会には、キリストがそうであるように、王、祭司、そして預言者としての使命があります。とりなし祈るのは、そのうち祭司としてのつとめです。同時に果たすべき重要な責任の一つは、預言者としての責任です。その模範は旧約の預言者とヨハネです。

しかし、敗戦後七十年を迎える日本の教会には深刻な反省があります。戦時下、教会は国のために「祈った」ものの、教会の指導者らは天皇の所や神社に行って護国必勝を祈願し、主日礼拝や新年礼拝で護国必勝と武運長久を祈願したからです。祭司としての役割を果たせませんでした。何でもいいからただ祈ればいいというわけではありません。何を祈るかが肝心です。一方で、預言者としての責任も全く果たせず、偽預言ばかりして、偶像崇拜を奨励し、侵略戦争を推進しました。敗戦後は、戦時中あまりに国策推進に関わり過ぎた反動か、あるいは「政教分離」についての誤解もあって、一部の社会派以外、教会は政治に無関心でした。

「政教分離」は、あくまで為政者が国民(教会)に宗教を強要できないとの原則であって、教会には信教の自由があり、為政者を批判する責任があります。私たちは、教会が今日どのようにして預言者としての責任を果たすかを真剣に考えてみるければなりません。キリスト者である私たち教会に何ができるのでしょうか。あるいは何をすべきでしょうか。

まずは為政者のために祈ることです。それもただ祈るのではなく、為政者が十戒を実現する政治をするよう、現代風に言えば「政教分離の原則を守り、国民の安全と福祉を増進する」よう祈りましょう。

そして次には、為政者がそのような統治をするよう、平和なあらゆる手段で為政者に働きかけましょう。今は民主主義の時代です。16,17世紀とは違います。私たち国民が主権者です。選挙、出版、訴訟、陳情(請願、ロビー活動)、デモへの参加によってそれが可能です。

最後に、ヨハネが預言することで、何か為政者あるいは国が変わったのかを考えてみましょう。ヘロデが急に改心して善人になるとか何か特別に変わったということはないと思います。でも、少なくとも、ヨハネはヘロデに神のみこころを伝えて彼に神の栄光をあらわしました。もともと、ヘロデはヨハネの話を当惑しながらも喜んでよく聞いていました。「それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。」(マルコ6:20) こうして、ヘロデは姦淫してはならないと教えられます。その教えを抹殺するも、今度はイエスキリストの宣教によって良心の呵責にさいなまれます。預言者は死んでも、神のことばは死にません。神のことばは神ご自身が語るのです。死ぬことがないのです。その語る主体は神です。遣わした預言者が殺されると、神は別の預言者を遣わしてまた語らせませす。そして、その語られた神のことばが世界をさばくのです。

こうして、ヨハネの宣教は、イスラエルと近隣諸国に神の栄光をあらわしました。為政者の悪政に対する神の怒りをあらわしたのです。どんなに「からし種」のように取るに足りなくちっぽけに見えても、預言者の語る神のことばこそが、実は世界の中心です。生きとし生ける全人類の悪をさばき、同時に死ぬべき罪人にいのちをもたらすのです。